

〔目的〕ぜんそく児童の数は年々増加していて、1960年は1%以下であったものが1970年代には1～3%、1980年代には3～6%である。連日の発作によって、日常生活は著しい障害を受けるが、その苦しみや障害も、病気の理解、本人の努力、家族の協力によって症状を軽くしたり、精神的または肉体的にも本人をはじめ家族の不安を和らげることができる。本報告は頻繁に発作を起こすが、ステロイド剤などを使用しないで現在普通の学校生活を送れる程度の中等度を対象とした。日常生活のなかで繰り返し行なわれるリズムを身につけ、心身の健康、親子の関係、生活の改善などについて考察する。

〔方法〕中等度のぜんそく児童40名（男子20名、女子20名）を対象にアンケート調査、聞きとり調査を行なった。摂取状況の調査では、保護者の協力を得た。被調査者は、塾、保育園を通して紹介をえた。期間は1986年3月から1987年2月までの一年間、春夏秋冬の四季にわたって調査した。

〔結果〕発作に対する恐怖感を持っているために、生活は控え目となり、用心深い。神経質で几帳面な子供が多く、非発作時の生活態度はしっかりしている。病院へ通うことが多く、その結果学校生活は欠席、遅刻、早退が目立ち、友達と活発に遊ぶことが苦手で友達関係においては消極的になってしまう。病気によいと思われているスポーツ、水泳はよくできる。度重なる発作に対して親の緊張と不安、家庭内のさまざまな葛藤が見られる。

食物には好き嫌いが多く、発作時は栄養が充分摂取出来ない。特に長期にわたる発作の場合、一時的に低栄養に陥り、体重は落ち、もとの生活に戻るのに時間がかかる。